

K-714

天童市埋蔵文化財調査報告書第21集

天童市西沼田遺跡

— 第 II 次 発 掘 調 査 概 報 —

平成 11 年 3 月

天 童 市 教 育 委 員 会

天童市西沼田遺跡

— 第 II 次 発 掘 調 査 概 報 —

平 成 11 年 3 月

天 童 市 教 育 委 員 会

序 文

今年度実施した西沼田遺跡の発掘調査は、平成9年度から国庫補助を受け実施している3箇年事業の2箇年目にあたります。

調査は、遺構・遺物の分布状況の確認を目的として、史跡指定地のもっとも北寄りの部分に発掘区を設けました。

これまでの調査において、遺跡北側は最も遺構・遺物の分布が希薄といわれておりましたが、今回の調査では大量の遺物が出土したことから、遺跡がさらに北側にのびる可能性がでてきました。遺跡の範囲は、我々が想像した以上に広大なものだったようです。

本書を今後の調査研究、あるいは埋蔵文化財に対する普及啓発の一助となるよう御活用いただければ幸いと存じます。

最後に、発掘調査のために御指導、御協力いただきました地元の方々、発掘作業員のみなさまをはじめとする関係諸機関、諸氏に厚くお礼を申し上げます。

今後とも適切な御助言、御指導を賜りますようお願い申し上げ、ごあいさつといたします。

平成11年3月

天童市教育委員会

教育長 武 田 良 一

例　　言

1 本書は、国史跡・西沼田遺跡の整備に係る第II次発掘調査の概報である。

2 発掘調査は、天童市教育委員会が実施した。

3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名　　西沼田遺跡

所在地　　山形県天童市大字矢野目 3295 番地

遺跡番号　天童市遺跡番号 114 番

調査期間

　　発掘調査　平成 10 年 6 月 15 日～平成 10 年 8 月 12 日

　　整理作業　平成 11 年 1 月 15 日～平成 11 年 3 月 31 日

調査担当

　　調査員　　押野一貴（社会教育課主事）

　　　　　　岡崎友美（社会教育課文化財専門員）

　　事務局　　深瀬正人（社会教育課長）

　　　　　　高橋秀司（社会教育課副主幹）

　　　　　　押野一貴（社会教育課主事）

　　　　　　岡崎友美（社会教育課文化財専門員）

　　発掘作業　林　愛子、林　ミヨ、大沼モト子、小笠原たけよ、林　喜代子、佐藤　こう、

　　　　　　佐藤　保子、大林あさ子、植松　礼三、熊沢　平作、後藤　庄二、水戸　秀雄、

　　　　　　木村　幸子、森　信次、竹田留美子、南雲　久範

　　整理作業　木村　幸子、閔沢千津子、小野由紀子、今田　郁枝、明石　達子、佐藤みち子、

　　　　　　久保　典子、工藤希理子

4 本書の執筆は高橋秀司の指導のもと、第I章を岡崎が、第II～IV章を押野が担当した。

5 発掘調査から本書の刊行に至るまで、文化庁文化財保護部記念物課、山形県教育庁文化財課、
（財）山形県埋蔵文化財センター、三郷堰土地改良区、仲野　浩、渡辺定夫、宮本長二郎、佐藤
信、田中哲夫、荒木志伸、辻　秀人、川崎利夫、村山正市、山沢　護の諸機関・諸氏から御指導・
御協力をいただいた。記して深謝の意を表する。

6 本調査で出土した資料は、天童市教育委員会で一括保管する。

本文目次

第Ⅰ章 序	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と環境	1
第3節 周辺遺跡と歴史的環境	2
第Ⅱ章 調査の概要	7
第1節 調査の方法と経過	7
第Ⅲ章 遺構と遺物	13
第1節 遺構	13
第2節 遺物	13
第Ⅳ章 まとめ	25

報告書抄録

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	3
第2図 グリッド設定図	7
第3図 発掘区設定図	9
第4図 土層断面図	11
第5図 遺構分布図	15
第6図 遺物分布図	15
第7図 西沼田遺跡出土遺物（1）	19
第8図 西沼田遺跡出土遺物（2）	20
第9図 西沼田遺跡出土遺物（3）	21
第10図 西沼田遺跡出土遺物（4）	22
第11図 西沼田遺跡出土遺物（5）	23
第12図 西沼田遺跡出土遺物（6）	24

図版目次

図版1 C 2 - f 1区、D 1 - a 9区、坏出 土状況	図版10 出土遺物（2）
図版2 瓢、高坏集中、坏出土状況	図版11 出土遺物（3）
図版3 D 2 - d 1区、甕、土玉出土状況	図版12 出土遺物（4）
図版4 甕、壺、高坏出土状況	図版13 出土遺物（5）
図版5 壺、木杭集中出土状況	図版14 出土遺物（6）
図版6 堅杵①(1)、(2)、堅杵②出土状況	図版15 出土遺物（7）
図版7 堅杵集中及び堅杵③、④出土状況	図版16 出土遺物（8）
図版8 堅杵⑤、及び筵状木製品出土状況、 作業風景	図版17 出土遺物（9）
図版9 出土遺物（1）	図版18 出土遺物（10）
	図版19 出土遺物（11）

第1章 序

第1節 調査に至る経緯

西沼田遺跡は、昭和60年度山形県営圃場整備事業・三郷堰地区に係ることから、山形県教育委員会によって、昭和59年度に現地確認調査が行われた。翌年には緊急発掘調査が実施され、この結果、6世紀を中心とする古墳時代後期の大変貴重な農村集落遺跡であることがわかった。

これを受けて天童市では、昭和61年7月に国指定申請を行い、翌年の昭和62年1月26日に国史跡「西沼田遺跡」として指定された。併せて、指定区域約33,000m²を史跡等公有化事業により取得し、保存活用を図ることとした。

その後、昭和63年から西沼田遺跡の保存、整備、活用の方向性について、有識者による検討会を行い、また平成5年からは、西沼田遺跡整備検討委員会を設置して、年1～2度は検討を行っている。

この検討委員会において、昭和60年度の緊急発掘調査で埋め戻した建築部材の状態確認と、木材の遺存状況、遺構の分布確認等が課題として出され、今後の整備計画を進めるうえでも重要な問題であることから、発掘調査を実施することが検討された。

天童市教育委員会ではこれらの課題を踏まえ、平成6年度から国庫補助事業として、発掘調査を実施している。今回の報告は、平成9年度から3箇年事業として行われているものの2箇年目にあたるもので、指定地内の遺構・遺物等の確認を目的とする調査である。

第2節 遺跡の立地と環境

西沼田遺跡は天童市大字矢野目字沼田地内に所在し、天童市の西方、主要地方道天童・大江線(県道23号線)の南側に位置している。標高は約90mを測る。

山形盆地は山形県内のほぼ中心部を占め、県内を縦貫する最上川は、盆地の西寄りを北流している。天童市はこの盆地の中央部に位置し、東は奥羽山系の山々、西は最上川、南は立谷川、北は乱川によって画されている。

立谷川、乱川はそれぞれ奥羽山脈より西方の最上川へ流れ込み、増水時の土砂の流出により、広大な扇状地を形成している。

立谷川扇状地は、高瀬川との複合扇状地で、当該扇状地の北半部が天童市域にあたり、乱川扇状地もいくつかの支流との複合扇状地であり、半径10～11kmにわたって広がっている。

これらの扇状地の扇端部には、豊富な湧水帯があり、多くの遺跡が分布していることからも、古くから人々の生活に密接な関わりをもっていたことがうかがえる。

また、天童市の西方を流れる最上川の右岸には、氾濫原によって形成された、幅0.5～1 km ほどの帶状の微高地が続き、この自然堤防と立谷川、乱川の両扇状地に囲まれた市域、平野部の三角状の地域には、いわゆる天童低地と呼ばれる後背湿地が広がっている。西沼田遺跡はこの中の微高地^{はんらん}上に立地している。

西沼田遺跡の周辺に目を向けると、南西方向に向けて舌状の微高地^{ぜつ}が連なっていることが確認でき、遺跡の東を流れる倉津川などの、扇状地扇端部を流れる河川に沿って、自然堤防が形成され、この微高地上に遺跡が営まれていたことがわかる。

微高地の南縁部を流れる前田川は、現在区画整理によって直線的な流路となっているが、旧河道は、後背湿地の低地をぬうように流れた自然河川であり、増水時には容易に出水したため、西沼田一帯は排水の不良な低湿地が広がっていたと思われる。

西沼田遺跡の位置する乱川扇状地扇端部の湧水帶付近や、現在の矢野目、塚野目集落の立地する微高地は、縄文時代後期以降から古墳時代、さらには奈良・平安時代にわたる集落遺跡が分布しており、比較的乾燥した微高地と、周りに広がる湿潤な低地は、水稻農耕の発達と、その後に続く集落の人々の生活を支える上で、非常に適した環境であったことがうかがえるのである。

第3節 周辺遺跡と歴史的環境（第1図）

西沼田遺跡は、古墳時代後期を主とする遺跡である。天童市ではこれまで大規模な発掘調査が行われていないため、詳細の不明な遺跡が多いが、各時代ごとに周辺部の遺跡を概観しておきたい。

天童市内において、旧石器時代の遺跡はまだ確認されていない。縄文時代前期の遺跡として、^{かみ}上荒谷（1）、^{かしわき}柏木（2）、地図外であるが、田麦野地区のかくまくぼ遺跡があげられる。^{あらや}

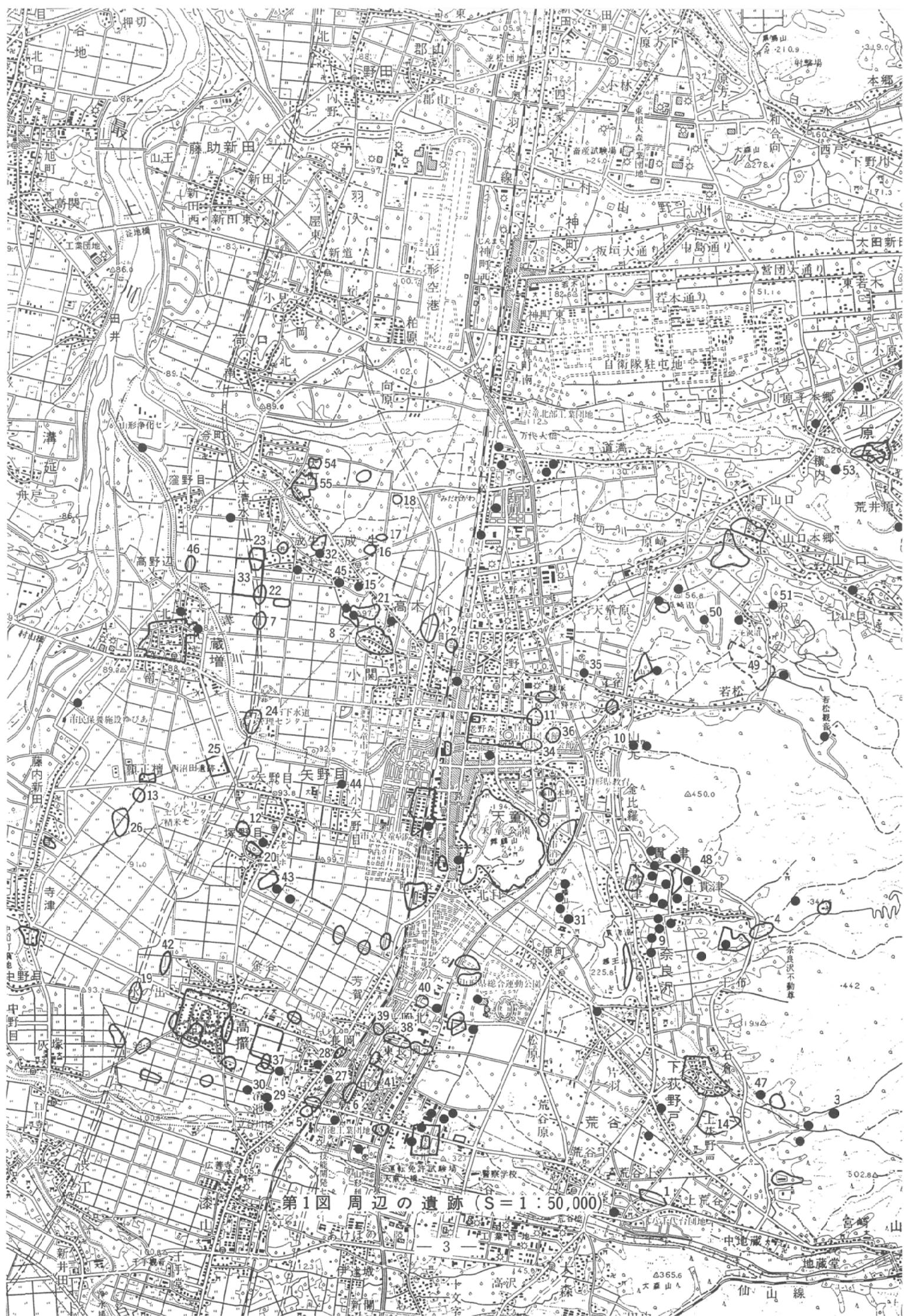
市内でもっとも古い縄文土器は、かくまくぼ遺跡から採集された縄文時代早期中ごろといわれてゐる土器片であるが、数片しか発見されず、詳しいことはわかっていない。

上荒谷遺跡は、立谷川扇状地の扇頂部に位置し、出土した土器片や、石鏃、土偶などから縄文時代前期初頭の遺跡である。ここで出土した土偶は高さ7.5cmで、頭部と両腕を胴体部に含めた素朴なもので、県内最古の土偶の一つである。

また、柏木遺跡は、縄文時代前期末の遺跡であり、乱川扇状地の南縁に位置している。

これらのことから、縄文時代前期後半ごろから扇状地の扇端部及びそれを望む地域に集落が形成され始めたことがうかがえる。

その後、中期から後期前半にかけては、伝覚平遺跡（3）、上貫津（4）のように山麓の湧水地^{でんがくだいら}または小河川の付近や、清池（5）、中里B（6）のように扇状地の湧水地に多くの分布が見られる。平成10年度に県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施している板橋1遺跡（7）においては、中期前葉の大木7a式と後期中葉の土器の2つの時期の遺物が出土し、県内での出土例が非常に少ないことから、貴重な調査例として注目されるところである。後期後半から晩期にかけては遺跡数が増^{かみぬくづ}^{ろく}^{いたばし}



加し、高木石田（8）、白山堂（9）、毘沙門寺（10）、綿掛B（11）など、扇状地扇端部の湧水帯や後背湿地上の微耕地に遺跡の分布がみられるようになる。西沼田遺跡周辺の矢野目地区では、遺跡の南に位置する矢口遺跡（12）から、竪穴住居跡と土器や石器などが、西側の願正壇遺跡（13）からも少量ではあるが縄文土器などが出土している。

また、立谷川扇状地の扇央部側縁に位置する宮田遺跡（14）からは、土器や石鏸、石錐、石匙、凹石、土製品が出土している。

後期後半から晩期、弥生時代にかけての遺跡は乱川扇状地の扇端部付近である成生地区の微高地に多く、地蔵池A（15）、金谷（16）、熊野堂前（17）、瓜小屋（18）などが挙げられる。なかでも地蔵池A遺跡からは、炉と思われる集石遺構を伴った住居跡の一部が検出されたほか、やや離れた地点より埋甕の遺構も検出されている。

また、立谷川扇状地の前縁部に位置する砂子田遺跡（19）からも、県埋蔵文化財センターによる平成10年度の発掘調査によって、河川跡の中州状の微高地から縄文時代後期の集落跡が検出され、その西側から、埋甕と思われる深鉢が大量に出土している。集落や河川など、当時の生活環境がこれだけの広さで発見されたのは県内でも珍しいことである。

古墳時代においても、扇状地の扇端部から天童低地まで、最上川の氾濫原の東端に沿って遺跡が広く分布している。

古墳時代前期の遺跡としては、塙野目A（20）、高木原口（21）、板橋2（22）、中期では同じく板橋2、的場（23）、蔵増押切（24）、後期では西沼田（25）、願正壇、鍋田（26）などが挙げられる。

板橋2遺跡、的場遺跡、蔵増押切遺跡は、前述した板橋1遺跡や砂子田遺跡と同じように、平成10年度に県埋蔵文化財センターにより、東北自動車道相馬・尾花沢線の建設事業に伴って発掘調査された遺跡である。

板橋2遺跡からは、第2次調査において、西沼田遺跡よりも古い古墳時代前期塙釜式の土師器が竪穴住居跡より出土し、また第3次調査においては、古墳時代中期南小泉式の土師器が炉跡を伴った竪穴住居跡より出土している。

的場遺跡からも、同じく古墳時代中期の土師器が炉跡を持つ竪穴住居跡から出土しているが、板橋2遺跡より時代は新しいようである。

蔵増押切遺跡では、古墳時代中期の竪穴住居跡が河川跡を挟んで帶状にのびている様子をみるとができる。

これらの遺跡の関係から、古墳時代の集落同士の結びつきや、生活様式を彷彿とさせるだけでなく、その変遷までもみていくことができるのではないかと期待される。

古墳に関しては、原形をとどめているものはほとんどなく、高擣地区の上遠矢塙古墳（27）がわずかに墳丘の面影を残している。

この古墳の西側には、下遠矢塙古墳（28）があったといわれているが、明治35年の高擣小学校建設の際に、土砂として利用され失われてしまった。

他に、遠矢塙古墳の南、清池八幡神社の近くにも火矢塙1号（29）、2号（30）が並んでいたとい

われているが、昭和27年頃の圃場整備により崩壊し、明治初年の地籍図にその存在を確認するのみとなっている。1号墳からは、割竹形木棺が出土したといわれるが、定かではない。

上遠矢塚古墳は、昭和50年から51年にかけて天童市史編さん室によって発掘調査が行われているが、その結果、径24m 前後の円墳で、外周には幅 5 m 前後、深さ0.5m から1.2m ほどの周濠が巡っていたこと、墳丘の崩れを防ぐため版築^{はんちく}で土を盛り固めた後、墳丘の下部と上部の墳頂を囲むように幅約 1 m の礫石帶^{れきせき}が葺石状^{ふきいし}に張り付けられていたことが明らかになった。

遺物としては、周濠からは、縄文時代中期末葉から後期前半頃と思われる土器や、平安時代末頃の土師器、須恵器、礫石群からは縄文時代から近世以降に至る時期に属する土器とともに鉄片や骨片が出土している。

ただ、明治12年の県道改修の際に行われた発掘調査で出土した、甲冑^{かつちゆう}、刀剣、頭蓋骨、歯骨、甕などの遺物は、現在全く所在不明であり、当時の村役人から天童警察分署へ提出された書類の中に見えるのみである。

古墳時代も終末にさしかかると、鍋田遺跡や高木原口遺跡、願正壇遺跡など、低湿地への進出が進むほか、山麓や河川の谷奥部に至るまで遺跡の分布がみられるようになる。

古墳の形態も、八幡山古墳^{はちまんやま}(31) や成生古墳群^{なりゅう}(32) にみられるような群集墳がつくられはじめまる。

奈良時代にはいると、律令体制の整備に伴い、条里制が施行されるが、天童市内においても8世紀後半には施行されていたと推測される。二条条里遺構^{にじょう}(33) や千刈条里遺構^{せんかり}(34) にその名残を認めることができるほか、明治初年の地籍図などで、高擣地区、成生地区、貫津地区などに広くその痕跡^{こん}をみることができる。

集落跡は、老野森の光戒壇遺跡(35) や温泉の北側にある千刈(36)、糠塚を含む一帯と、清池の西側の礼井戸^{れいいど}(37)、芳賀の東の桜段^{さくらだん}(38)、岡屋敷^{おかやしき}(39)、芳賀古屋敷^{はがふるやしき}(40)、現長岡団地の中里B^{なかざと}(41)などの立谷川扇状地の扇央部や、中袋^{なかぶくろ}(42)、塙野目B^{こやのめ}(43)、小矢野目^{こやのめ}(44)、地蔵池B^{じぞうち}(45)、蔵増北B⁽⁴⁶⁾などの扇状地先端部に遺跡が多く分布している。

中袋遺跡も平成10年度に県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われた遺跡であるが、当時の官人の着用した石帶や官衙などの公の宴会で使用されたとされる耳皿、埋葬施設と考えられる口甕棺などが出土している。

これらの集落から出土する須恵器を焼いたと推定される窯跡は、市内では、石倉窯跡^{いしがら}(47)、貫津御阿弥陀窯跡^{ぬくづみだ}(48)、二子沢窯跡群^{ふたごさわ}(49)、原崎古窯跡群^{ばらざき}(50)、瀬戸山古窯跡^{せとやま}(51)、荒井原窯跡^{あらいはら}(52)、谷地中窯跡^{やちなか}(53) などが、確認されている。

中世においては、蔵増押切遺跡、二階堂^{にかいどう}(54)、高野坊^{こうやぼう}(55) など、成生庄関係の遺跡が目立つ。成生庄は現在の天童市のほぼ全域を含み、安元2年(1167)「八条院目録」に「出羽国大山成生」として記載されていることから、12世紀頃には成立していたと思われる。

二階堂遺跡は、大清水の北に位置する、一辺120m、つまり方一町を幅約12m の空濠^{からぼり}で囲まれた一画であるが、不明な点が多く、「二階堂」や「二階堂池」などの地名から、鎌倉幕府の地頭二階堂氏

の館若しくは成生庄を管轄する政庁跡ではないかと考えられている。

また、この遺跡のすぐそばには高野坊遺跡があり、平成8年度に天童市教育委員会が実施した調査において、成生庄や時宗の動向を示す墨書きが多量に出土し、当時の様相が明らかになりつつある。昨年、県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施された蔵増押切遺跡からは、古墳時代の遺物・遺構が出土した範囲よりもさらに南側の地区から、掘立柱建物跡、井戸跡などが検出され、有力豪族の屋敷跡ではないかと推測され、注目されているところである。

第II章 調査の概要

第1節 調査の方法と経過

発掘調査は平成10年6月15日から同年8月12日にかけて実施した。

グリッド設定は、史跡指定範囲に対して40m方眼の大グリッドを設定し、東西方向にアルファベット（大文字）を、南北に数字を付した。また、それぞれの大グリッドに4m方眼の小グリッドを設定し、東西方向にアルファベット（小文字）、南北方向に数字を付して呼称している（第2・3図）。

これまでの調査では、遺跡の北側では、中央部分と比較して建築部材や遺物の分布が希薄であると想定されており、どのあたりまで建築部材、遺物の分布が広がるのか、また、水田等の生産遺構が存在するかどうか、ということを主な目的として調査区を設定した。

上記の目的から、調査区をC1～F1区に設定した。

はじめに、2m幅のトレンチをC1—a10～F1—j10区にかけて設け、遺構・遺物の確認を行った。

この段階で、F1—i10区で溝もしくは旧河川跡が確認された。また、C1—j10、D1—a10区で大量の建築部材や土器が良好な状態で確認され、溝跡が確認されたF1—i10区と遺物が大量に出土したC・D1区間は、建築部材、遺物とともに分布が希薄であった。また、III層上及びIIa、IIb層間に数枚の砂層が確認されたことから、遺跡は数度にわたって河川の氾濫を受けたことが想定された。

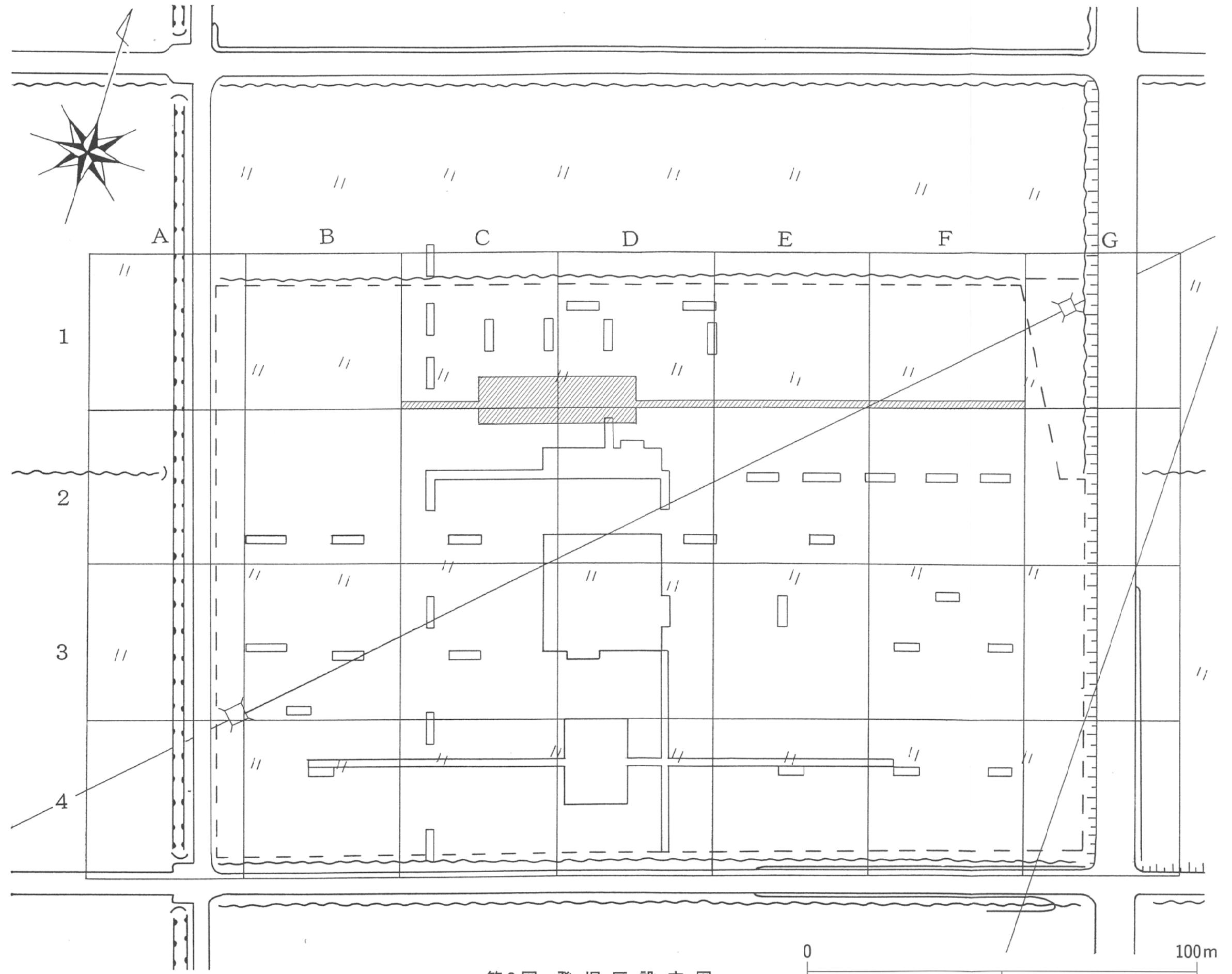
従って、上記の試掘段階での成果を受けて、C1、D1区を中心として拡張を行い、調査区を設定した。範囲は南北12m、東西40mで、面積480m²である。

拡張区からは、建築部材、遺物ともに大量に出土した。分布状況をみると、建築部材は北側半分に多く分布し、遺物は南側に多く分布する傾向にある。また、掘立柱建物跡を構成すると考えられる木杭の分布は遺物の分布と重複する傾向にあり、建築部材と遺物が重複しないのとは対照的である。

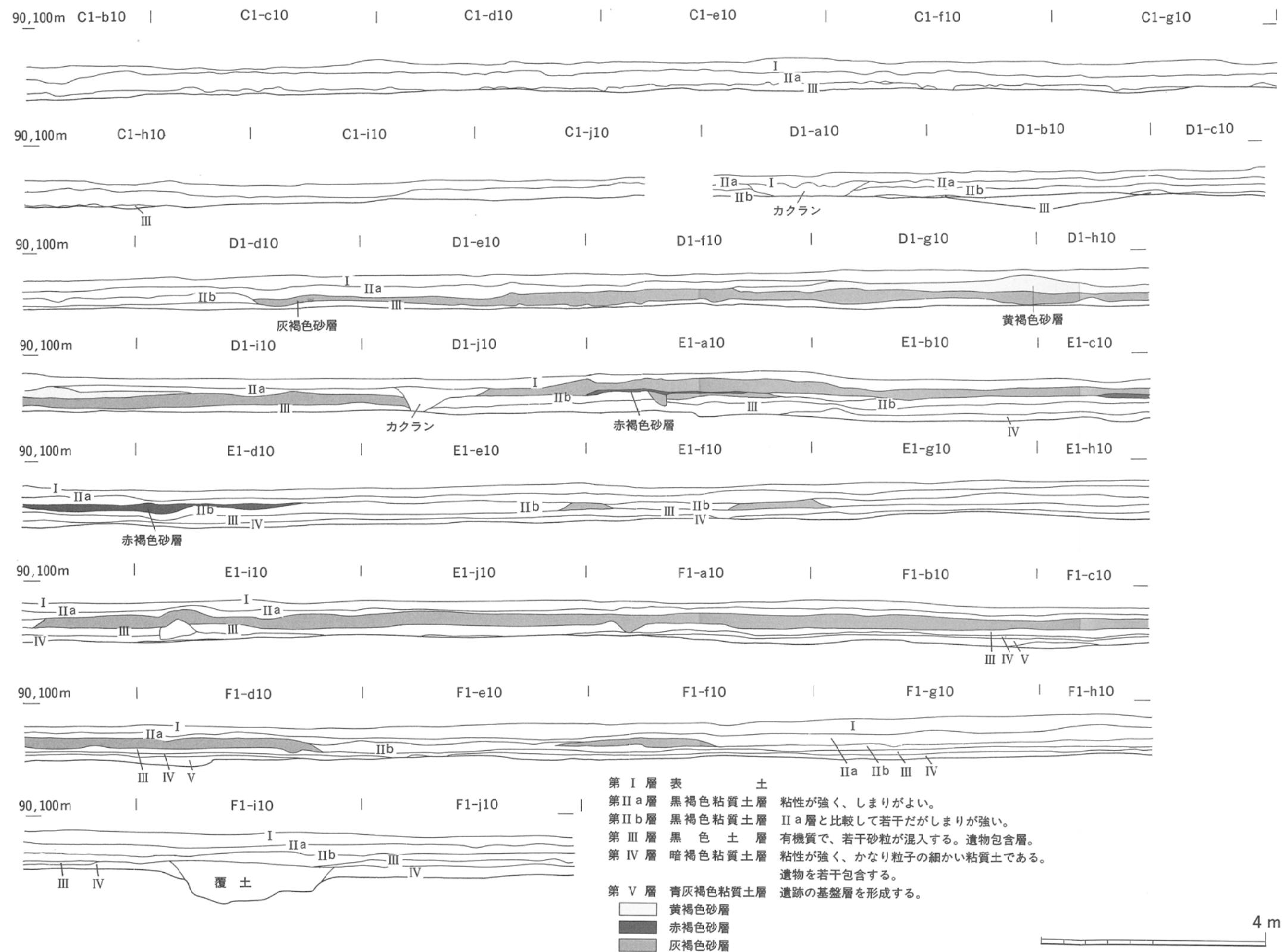
建築部材は昭和60年度の調査と比較して細長いものが多く、また土器類は、昨年度の調査では壊、高壊が主体であったのが、本年度の調査では、甕、甌類が多いように感じられた。ほかに、木製品として堅杵や筵状製品、桜皮等が出土している。

a1	b1	c1	d1	e1	f1	g1	h1	i1	j1
a2	b2								
a3		c3							
a4			d4						
a5				e5					
a6					f6				
a7						g7			
a8							h8		
a9								i9	
a10									j10

第2図 グリッド設定



第3図 発掘区設定図
(斜線部 10年度調査範囲)



第4図 土層断面図

第III章 遺構と遺物

第1節 遺構（第5図）

今回の発掘調査でも、豎柱をはじめとして、建築部材等の多くの木製遺物群が出土している。建築部材の分布を観察すると、大きく二つの集中区が認められる。一つは、C1-f9～C1-h9あたりにかけての分布がみられるもので、分布の少ないC区とD区の境界を挟んで、もう一つがD1-c9～D1-e9、D1-c10・d10にかけて分布する一群である。微視的にみれば、C1-g10・C2-f1に集中するものや、D1-a9に分布するものなども、一つのまとまりとして捉えられようが、大きくは前述の2群に分けられる。両群ともに発掘区の北側に多く分布し、南側には相対的に分布が少ない。建築部材は、細長い材が中心を占め、一部割り材と考えられるものや、面取りを施しているものも観察された。板状のものもみられる。

木杭の分布状況は、建築部材の分布とは異なり、発掘区の南側に多く、また、分布の希薄であるC区とD区の境界あたりに多く分布している。

第2節 遺物（第6～12図）

今回の調査で出土した遺物は、木製品、土師器、須恵器、石製品等である。

木製品では、今回図示しなかったが、豎柱、桜皮、筵状の製品等である。

土師器は、壺、高壺、壺、鉢、甕、甑、手尽くね土器等である。量的には、甕、甑、壺などの器種が卓越し、壺、高壺は量的に少ない印象を受ける。須恵器は、ほとんど出土していないが、口縁部を欠損する壠、半完形の甕のほか、若干の破片資料が出土しているのみである。

ほかの遺物として、土玉、土製及び石製の紡錘車、管玉、砥石、磨製石斧等が出土している。

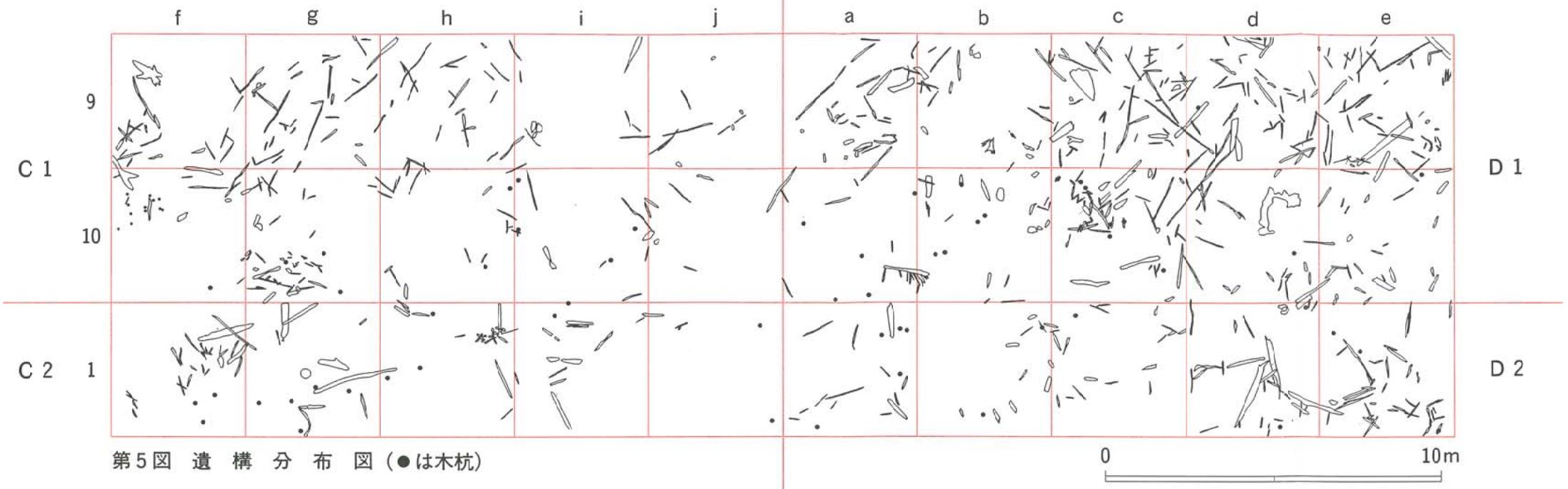
遺物の分布状況は、全体的にみて、発掘区の南側により多く、またC区よりもD区に多く分布する。特にD2-a1・2区、D2-e1区から多く出土している。先にみた木材の分布と比較すると、建築部材の少ないところに遺物の分布が集中するようであり、また、木杭の分布とは重複するような関係がみられる。

今回出土した遺物で図示したのは46点である。

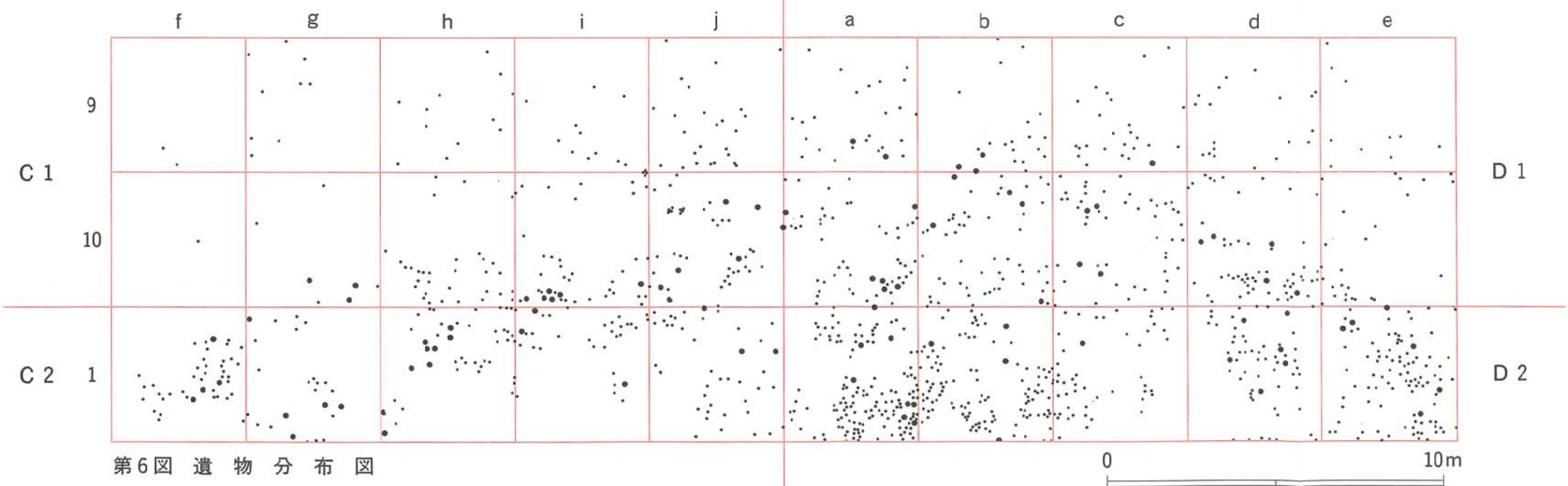
1) 土師器（第7図～第11図）

1～16は土師器壺である。1は平底に近い偏平な底部をもち、緩やかに立ち上がる体部をもつ。底部と体部の境はあまり明瞭でない。外面にヘラケズリを施している。2は底部が平底で、内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反する。内面にヘラミガキを施した後、黒色処理を施している。3～5は、底部が丸底で、体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。体部と口縁部の境には明瞭な稜を形成しないという点で共通の特徴を有する。5は内外面ともに剥落が著しく、調整は不明であるが、3・4は内面にヘラミガキを施したのち、黒色処理を行っている。

6～16は体部と口縁部の境に明瞭な稜を形成する一群である。また偏平な丸底の底部を有する点



第5図 遺構分布図(●は木杭)



第6図 遺物分布図

でも共通する。6・7は口縁径に対して器高が大きく、口縁部は短く、あまり外傾せずに直立に近く立ち上がる。体部と口縁部の境に緩やかな稜を形成する。6は体部から底部にかけて外面にヘラケズリ、口縁部にヨコナデを施し、内面はミガキによる。8・9は、口縁部の外傾が小さく立ち上がるという点で、6・7に近いが、器高が低く、扁平である。10は体部中程が強くくびれ、口縁部にかけての内外面の稜の発達が著しい。また、口縁部の外傾の度合いが増す。11・12は、6～9と比較して、若干口縁部の外傾が強い。13～16は口縁部が長く、かつ外傾が強い一群である。6～16は、いずれも内面にヘラミガキを施した後、黒色処理を行っている。

17～21は高壺である。17は壺部に比較して、脚部が低く、裾部が八字型に大きく外反する。18・19・21は、脚部が大きく、裾部が外反する。20は、平らな裾部から、直立に近いかたちで脚部が立ち上がる。また、壺部も18・19・21と比較して口縁部が大きく、かつ外傾が強い。

22～25は鉢である。22は体部が外傾しながら直線的に立ち上がり、底部は平底をなす。外面はヘラケズリを施している。23は平底の底部から、若干外傾しながら口縁部にかけて立ち上がる。24は平底の底部を有し、体部が内湾しながら立ち上がり、口唇部が短くつまみ出されている。いずれも剝落が著しく、調整は不明である。25は丸底であり、若干内湾しながら立ち上がり、内面に稜を有しながら口縁が短く外反する。内外面にヘラケズリを施している。

26～30は壺である。26は、平底に近い扁平な底部を有し、胴部が球形に膨らむ。胴部のやや上部に最大径をもつ。頸部のしまりは若干強く、口縁部は外反する。胴部はヘラケズリ調整、口縁部はヨコナデによる。27は、平底で、胴部は扁平でつぶれており、頸部は垂直に近く立ち上がり、口縁部はやや外反する。胴部ハケメ、口縁部ヨコナデによる調整が施されている。28は平底で、胴部が内湾気味に立ち上がる。頸部のしまりはほとんどなく、口縁部が外反しながら短く立ち上がる。胴部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデの調整の違いから、頸部には浅い沈線条の境界が形成されている。29は平底で器高が高く、胴部の膨らみはあまり大きくない。胴部ほぼ中央に最大径を有する。頸部に浅いくびれをもち、口縁は緩く外反しながら立ち上がる。30は底部が無調整で、体部が垂直に立ち上がり、口縁が大きく外反する。外面ハケ調整、内面ヘラケズリを施している。口縁は、大きく外傾する。

31～37は土師器甕である。31は底部が欠損していて器種的には不明であるが、ここでは甕に分類した。頸部のしまりは緩く、口縁部は緩やかに外反する。32は長胴型の甕である。胴部最大径は中位にくる。胴部はハケ調整、口縁部はヨコナデが施されている。口縁部は緩やかに外傾しながら直線的に立ち上がる。33は鉢型の甕であろうか。頸部は強くくびれ、稜を形成する。内面は胴部上位にハケメ調整、下位にヘラミガキ上の調整がみられる。底部には直径22mmのくぼみが認められる。器形的に類似する41の甕と同様、焼成後に穿孔しようとしたものであろうか。34は胴部下半から欠損するが、32と同様の形態をなすものであろう。最大径は胴部中位にくる。頸部には、調整の境目に浅い沈線状のものが形成され、口縁部は外反する。35は最大径が胴部やや上位にくるものである。口縁部は短く外反し、外面には稜が形成される。内外面ともにハケ調整が施される。36、37は胴部が球胴型を呈するものである。36は口唇部が平滑で、口縁部は外傾気味にがちあがる。底部から体

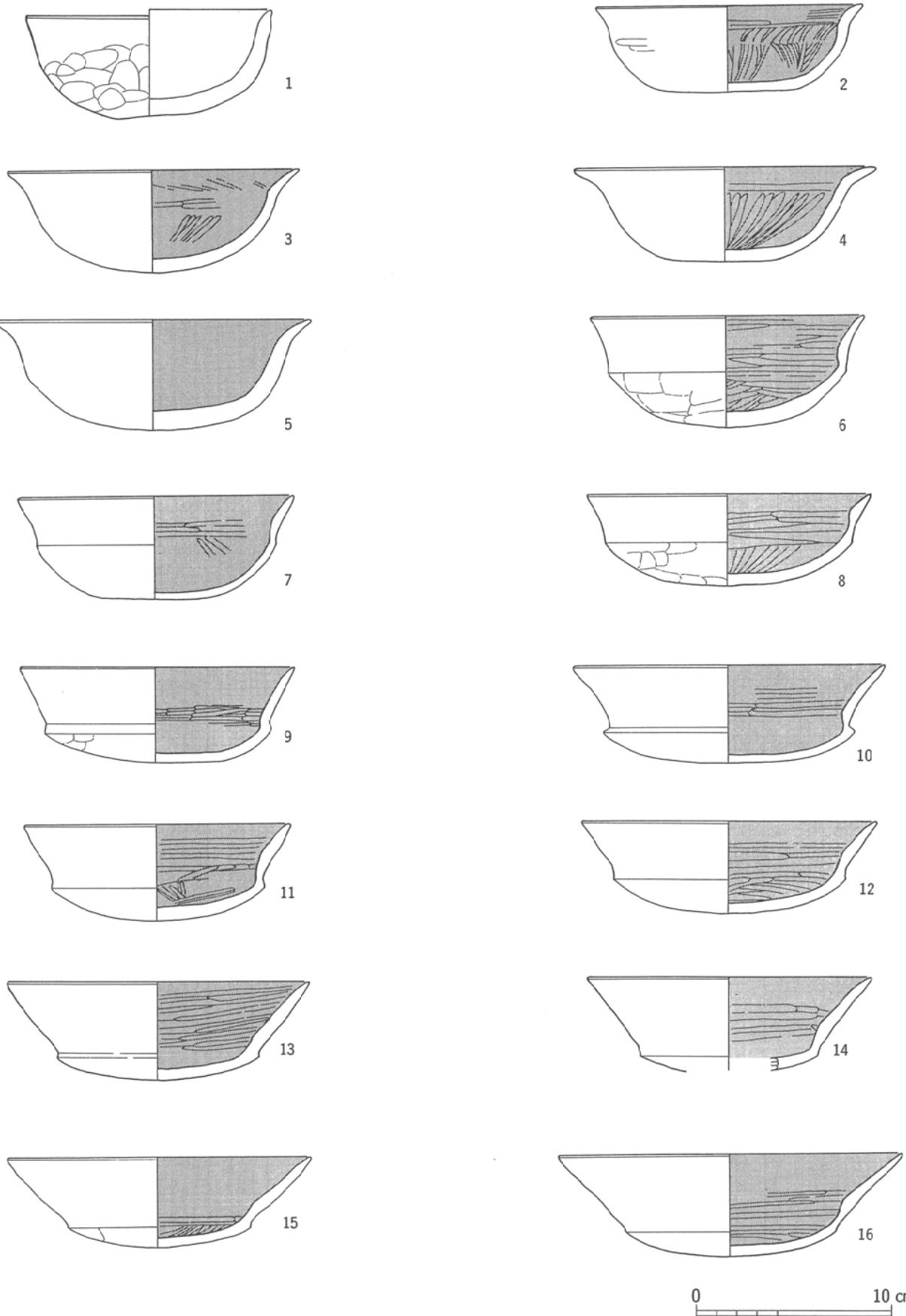
部にかけての立ち上がりは、明瞭である。37は底部は台状に整形されている。外面はハケ調整、内面はヘラケズリが施されている。口唇は、36同様ヘラで調整を加えたもので、平滑に整形されている、口縁部は短くつまみ出されている。

38～43は甌である。単孔式のものと無底式のものの2者が認められる。38・39は小型で、単孔式のものである。調整はヘラケズリによる。38は頸部に稜を有する。体部は外傾しながら直線的に立ち上がり、口唇が短くつまみ出されている。40も単孔式のものであるが、底部が厚手である。調整は内外面ともにハケメ調整が施されている。口縁部内面に緩やかな稜を形成し、口唇が内側に短くつままれている。41は鉢型のものである。底部はやや厚手で、口縁部は大きく外傾する。口唇が平滑に整形されている。

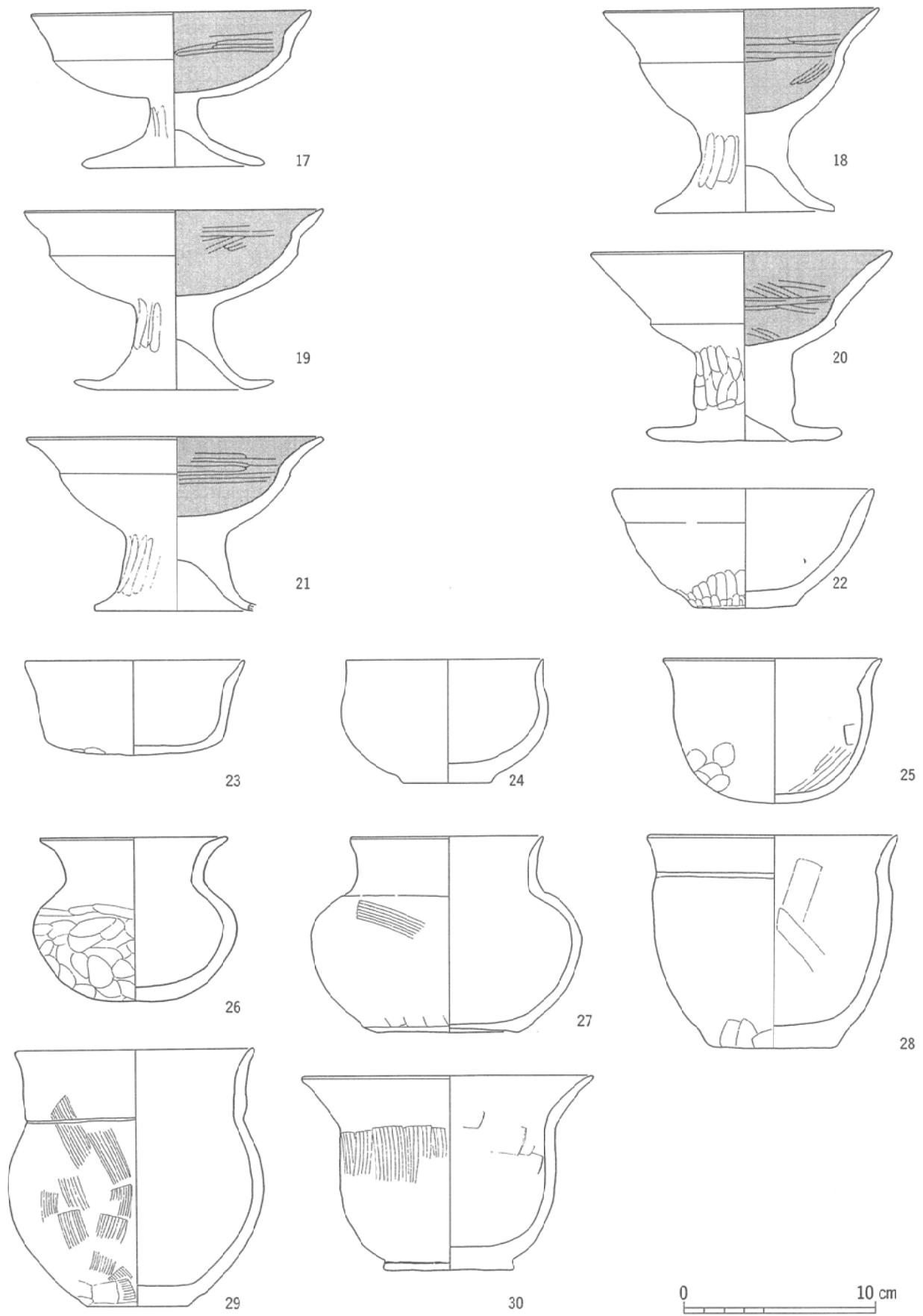
42・43は無底式の甌である。体部外面はハケ調整、口縁部はヨコナデによる整形が施されている。43は内面上半にもハケ調整が施されている。また、両者ともに、口唇部が平滑に整形され、42は内面に明瞭な稜を形成している。

2) 須恵器（第12図）

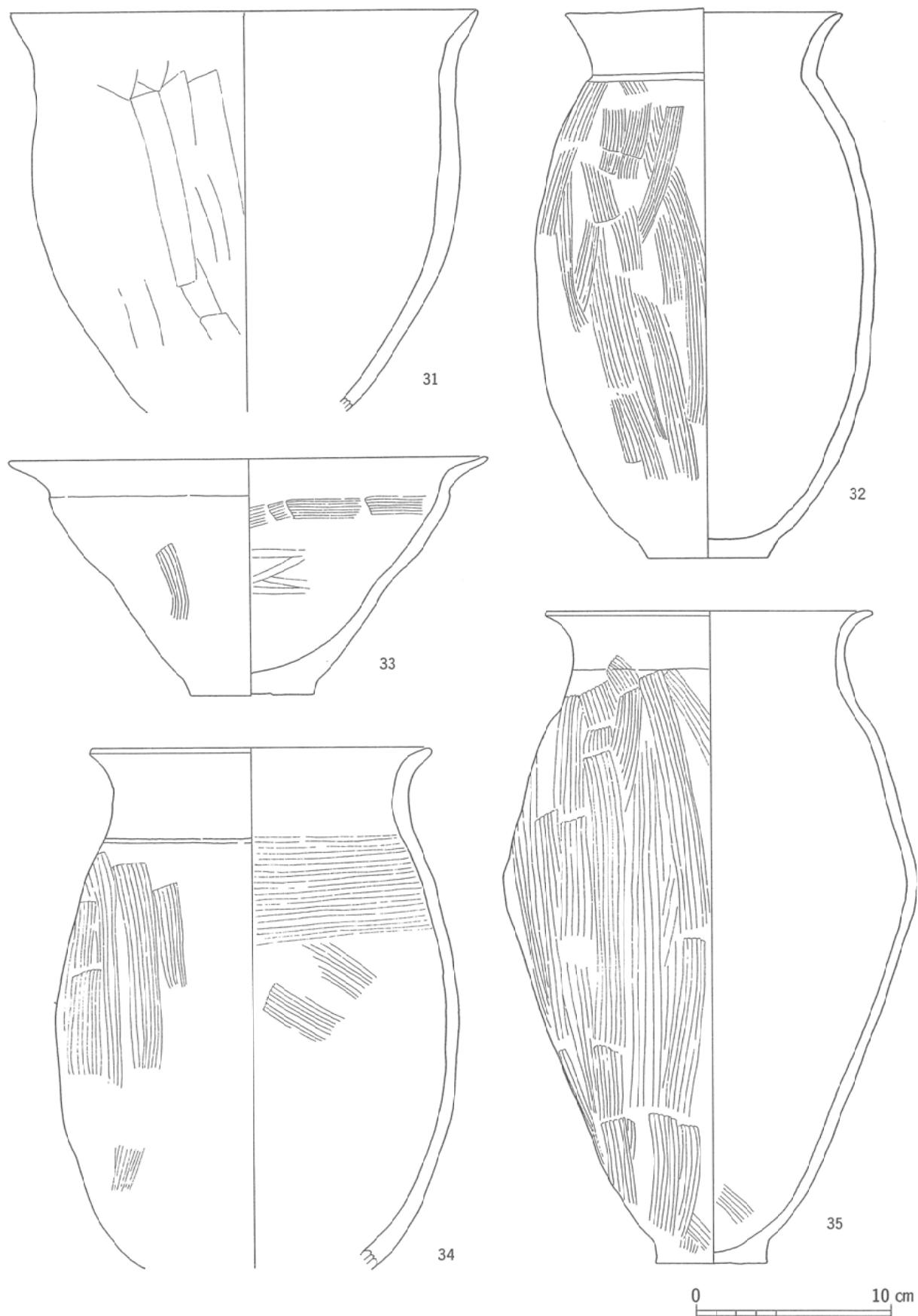
44は須恵器壺である。最大径は胴部やや上位である。頸部及び体部の施文は押引状のものである。45は須恵器甌の胴部破片である。外面は平行叩き目、内面は青海波紋の当て痕を残すものである。46も須恵器の甌である。口縁部が折り返し状の有段口縁である。体部の調整は叩き調整の後、胴部上半から中位にかけて平行叩き目を施している。45は焼成が良好で、色調はネズミ色を呈するが、46は焼成が不良で、ややもろく、乳白色を呈する。



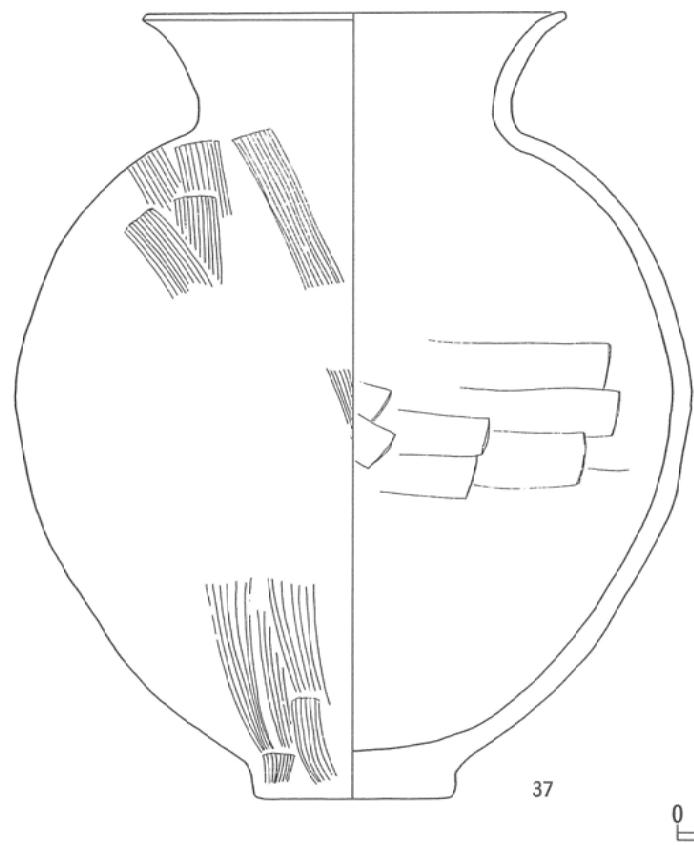
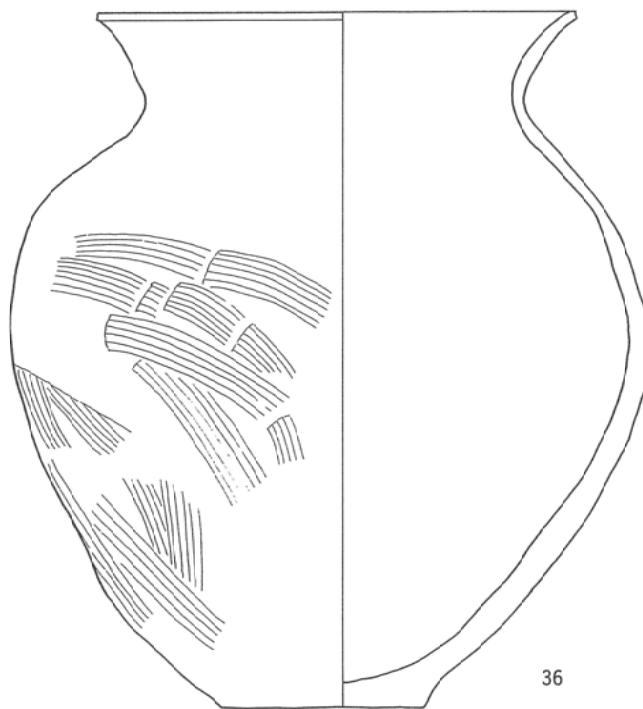
第7図 西沼田遺跡出土遺物（1）



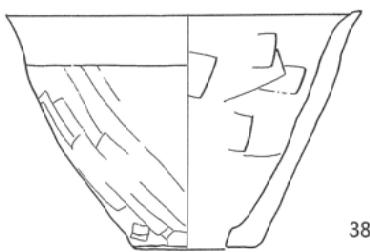
第8図 西沼田遺跡出土遺物（2）



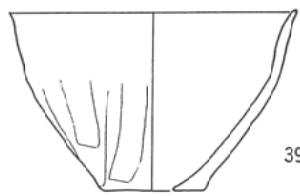
第9図 西沼田遺跡出土遺物（3）



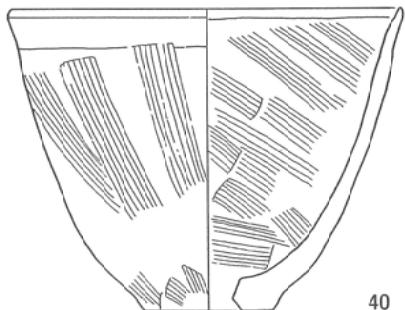
第10図 西沼田遺跡出土遺物（4）



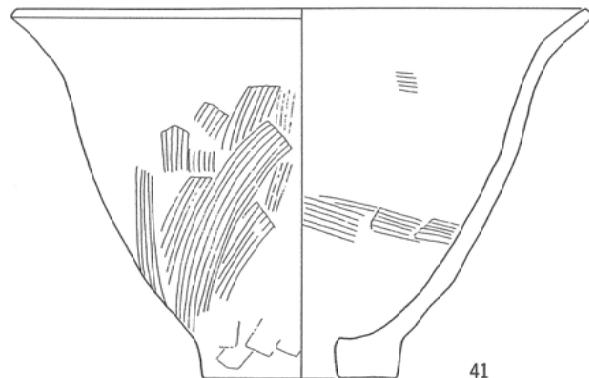
38



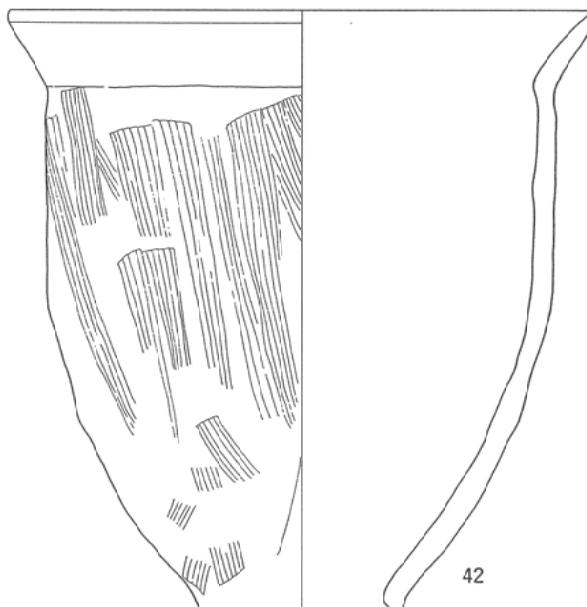
39



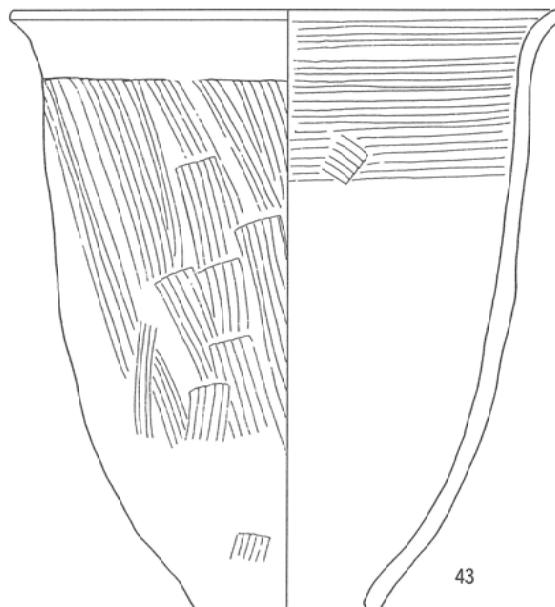
40



41



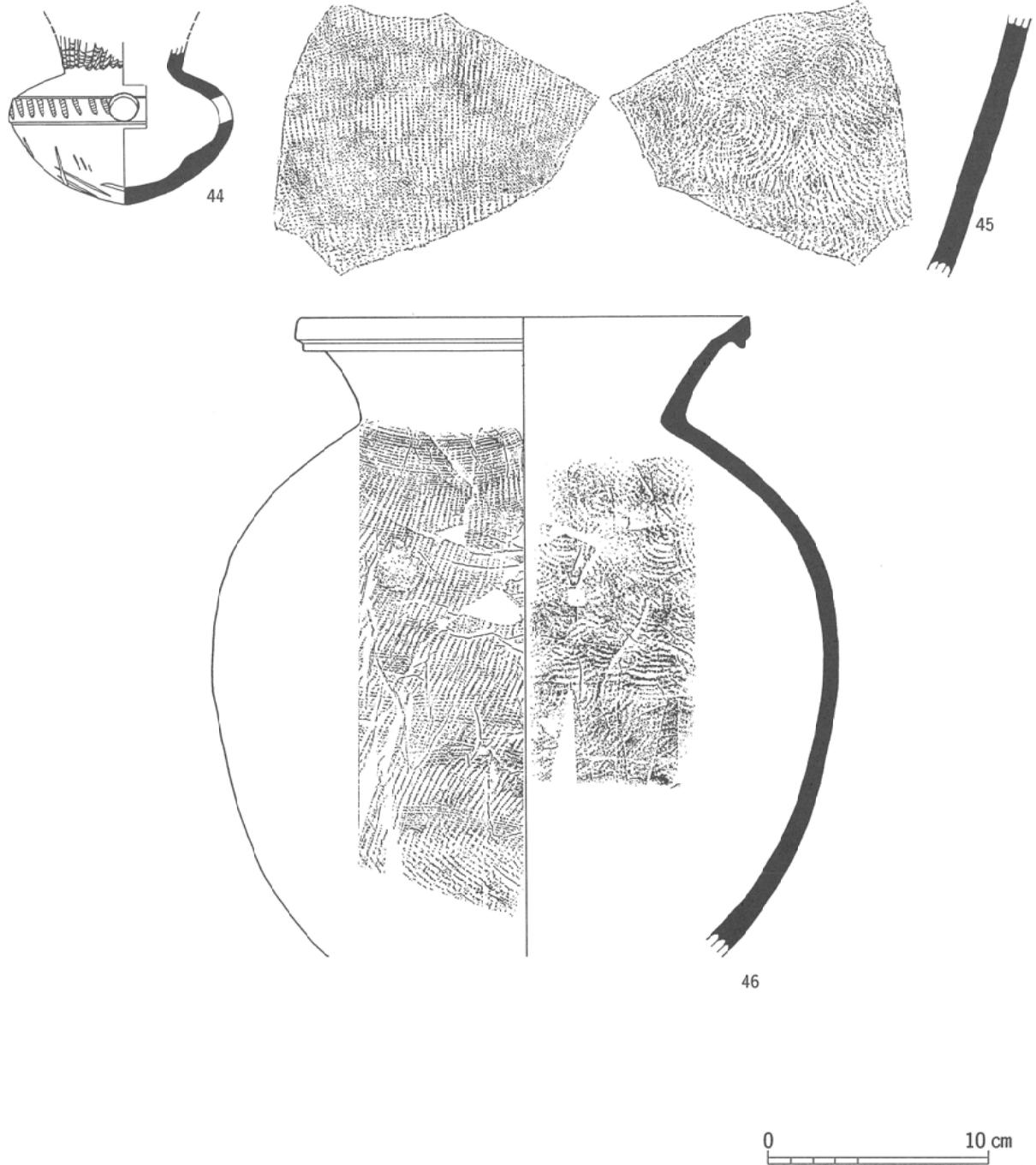
42



43

0 10 cm

第11図 西沼田遺跡出土遺物（5）



第12図 西沼田遺跡出土遺物（6）

第IV章 まとめ

今回の調査においては、昭和60年度、平成9年度の調査と比較しても遜色のない、良好な遺構・遺物が検出されている。詳細については、今後の検討課題であるが、現時点で判明していることについて若干のまとめを行っておきたい。

はじめに分布状況についてであるが、建築部材は調査区の北側半分に多く分布する状況がみられる。特にD 1-c 9～D 1-e 10区にかけて密集して検出されている。一方で、掘立柱建物の柱と考えられる木杭及び土器等の遺物は調査区南半分に密集して分布しており、それぞれの分布域がずれるところが興味深い。建物の本來的な位置が木杭群の分布するところであると想定できるならば、調査区北側に分布している建築部材群は、本來的な位置から動いていることになる。III層上もしくはII a、II b層間に砂層が厚く堆積していることから、河川の氾濫等により流された可能性も考えられよう。

遺物については、遺構単位での取り上げができなかつたため、明確な一括遺物としてまとめられるものではない。分布状況からは、いくつかのブロックが抽出できそうであるが、現在整理作業途上であり、それぞれのブロック毎の器種組成等の分析は今後の検討課題としたい。ここでは、出土土器の概略について紹介し、年代的変遷について若干の考察を試みたい。検討器種は、土師器壺を主に取り上げた。

土師器壺は内湾して立ち上がる体部と直立気味の口縁部をもつI群(第7図1)、平底、丸底の別が認められるが、内湾して立ち上がる体部と明瞭な稜をもたず、口縁部で外反するII群(第7図2～5)、内湾しながら立ち上がる体部と、体部中位前後に明瞭な稜を形成し、屈曲して外傾ないし外反して立ち上がる口縁部をもつIII群(第7図6～12)、最後に扁平な丸底を呈し、体部下半、底部外周上に明瞭な稜を形成し、屈曲して口縁部が直線的に外傾し「八」の字状に広がる第IV群(第7図13～16)に分けられる。第7図2～16は内面に黒色処理が施されている。

それぞれの土器群の特色からは、I群はいわゆる南小泉式、II・III群は住社式、IV群は栗園式の範疇で捉えられるものである。年代的には5世紀後半から7世紀の前半までにわたるものである。

土師器壺は、昨年度の調査同様III・IV群の土器、いわゆる住社式と栗園式に比定されるものが、大半を占め、南小泉式以前のものはほとんどみられない。

また、高壺にしても、脚部、裾部のバリエーションはあるものの、壺部に関しては住社式と栗園式の特徴が強いものである。このような高壺の壺部が各型式の特徴的な器形をもつようになるのは、住社式から増大する傾向にある。今回は図示できなかつたが、ほかの高壺とは一線を画す、口径240mm、底径144mm、器高148mmで、朱彩の施されたものも出土している。

甕に関しては、長胴形のものが大半を占め、住社、栗園式の特色を示す、体部が長く、底部が比較的小さい安定性を欠くものが多く、栗園式の特徴である頸部に段をもつものも若干みられる。

須恵器に関しては、出土量が少ないため断言はできないが、廳等の特徴をみると、陶邑編年のII

期に対比されると考えられるが、土師器との整合性が問題となろう。

引用・参考文献

- 氏家和典1957「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯
名和達朗ほか1985『西沼田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第101集
阿部明彦1987『三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書（2）』
　　山形県埋蔵文化財調査報告書第107集
白鳥・古川1991「2 土師器の編年 8 東北」
　　『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』雄山閣
渡邊泰伸1991「3 須恵器の編年 9 東北」
　　『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』雄山閣
天童市教育委員会1998『西沼田遺跡—第Ⅰ次発掘調査概報—』
　　天童市埋蔵文化財調査報告書第20集

写 真 図 版

①



C 2 - f 1 区出土状況

②



D 1 - a 9 区出土状況

③



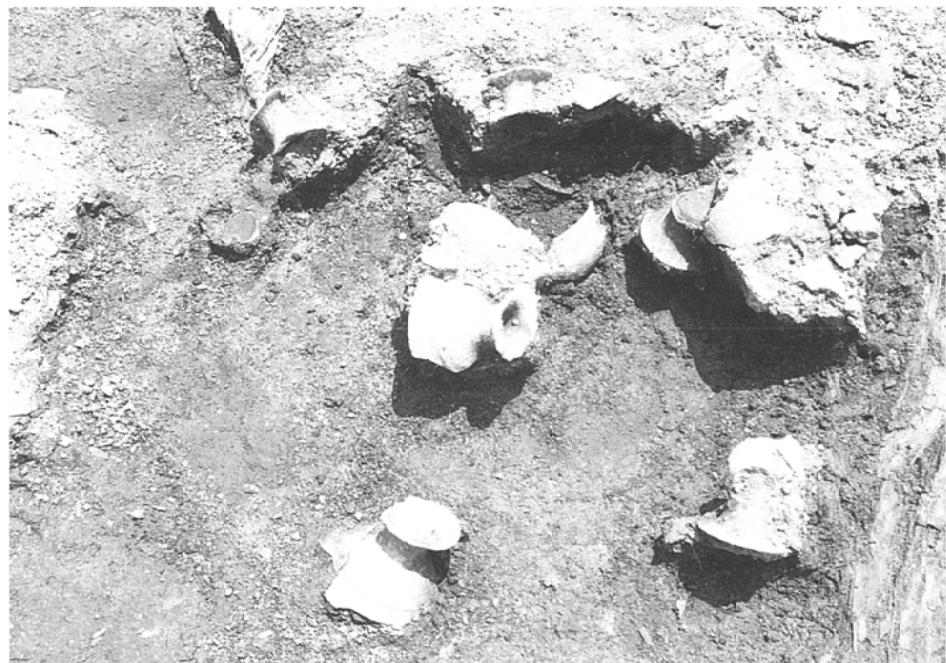
壙出土状況

④



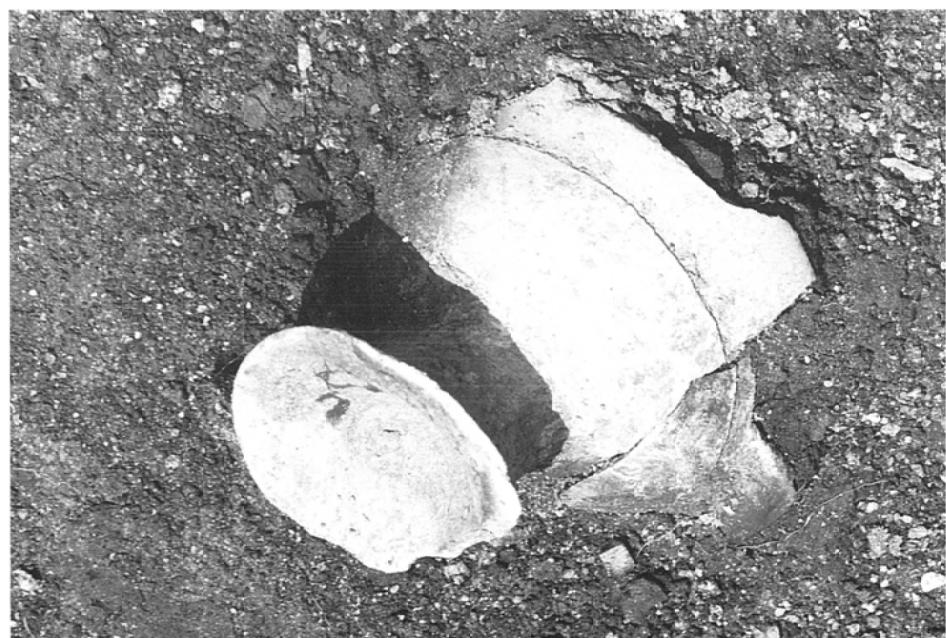
甑出土状況

⑤



高壙集中区

⑥



高壙出土状況

⑦



D 2 - d 1 区出土状況

⑧



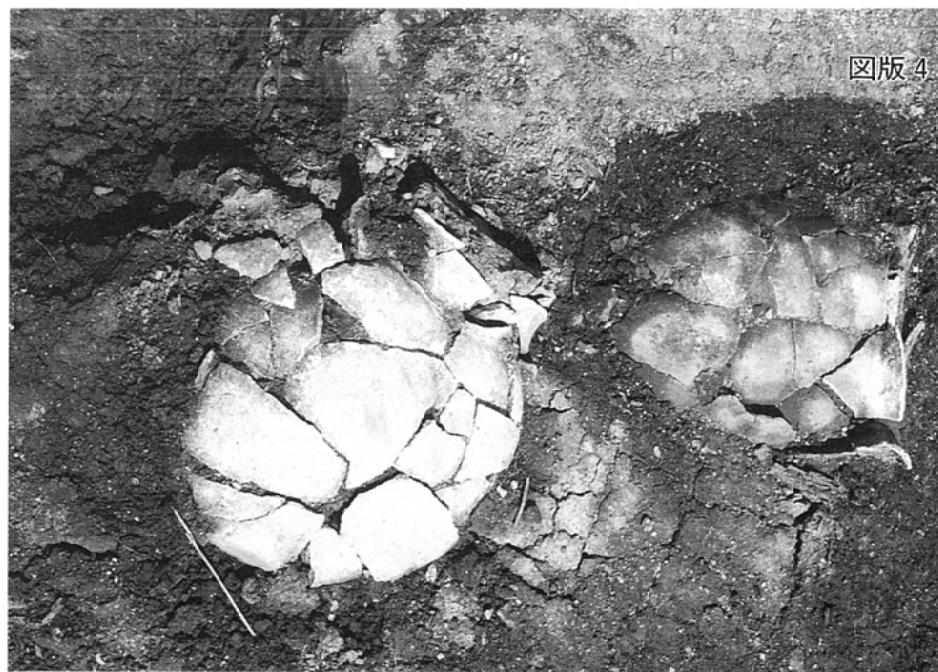
壺、土玉出土状況

⑨



壺出土状況

⑩



壺出土状況

⑪



壺出土状況

⑫



壺出土状況

⑬



壺出土状況

⑭



壺出土状況

⑮



木杭検出状況

⑯



豎杵①出土状況(1)

⑰



豎杵①出土状況(2)

⑱



豎杵②出土状況

⑯



③～⑤豎杵出土状況

⑰



豎杵③出土状況

⑲



豎杵④出土状況

②②



堅杵⑤出土状況

②③



縫状製品出土状況

②④



作業風景



第7図1 ①



②



④



③



⑤



⑥



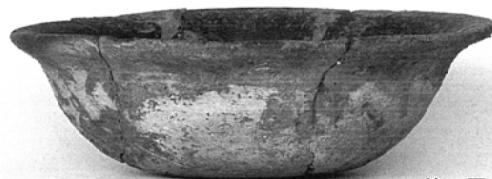
⑦



第7図2 ⑧



第7図3 ⑨



第7図4 ⑩

出土遺物 (1)



第7図5 ⑪



第7図6 ⑫



⑭



⑬



⑮



第7図7 ⑯



⑰



第7図8 ⑱



第7図9 ⑲



第7図10 ⑳



第7図11 ⑪



⑫



第7図12 ⑫



第7図13 ⑬



第7図14 ⑭



第7図15 ⑮



第7図16 ⑯



⑰



⑱



⑲



③1



③2



③3



③4



第8図17 ⑤



第8図18 ⑥



第8図19 ⑦



第8図20 ⑧





④7



第8図28 ④8



④9



第8図29 ⑤0



⑤1



⑤2



第8図30 ⑤3



⑤4



⑪



⑫



第10図36 ⑬



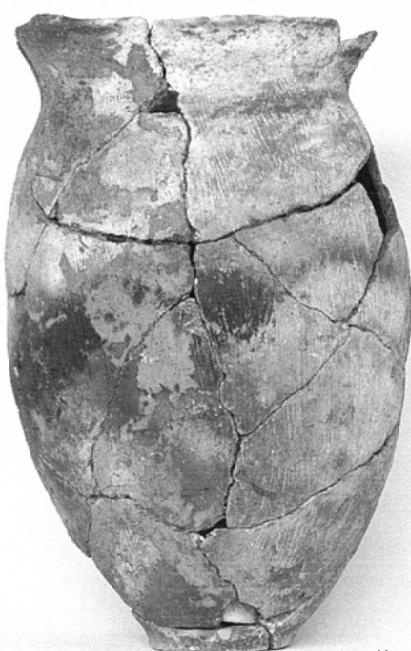
⑭



第10図37 ⑤1



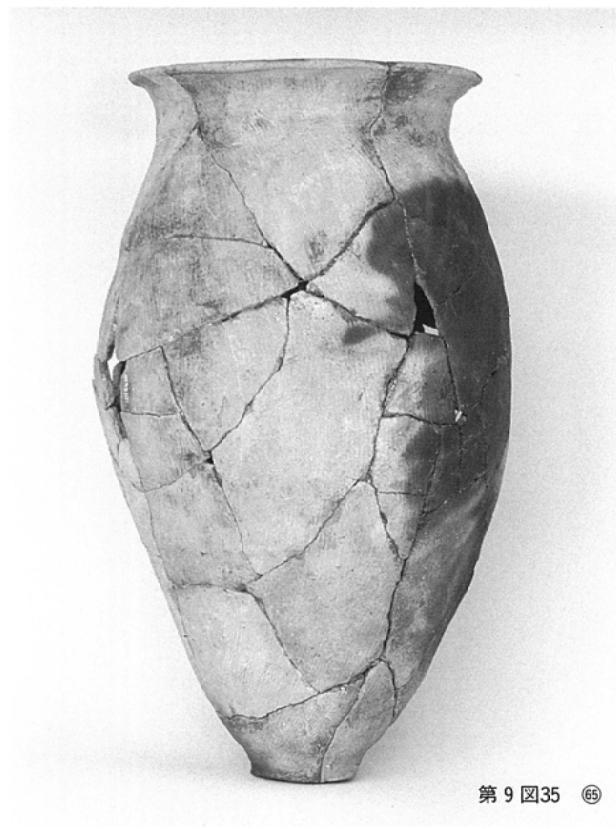
⑤2



第9図32 ⑥3



第9図34 ⑥4



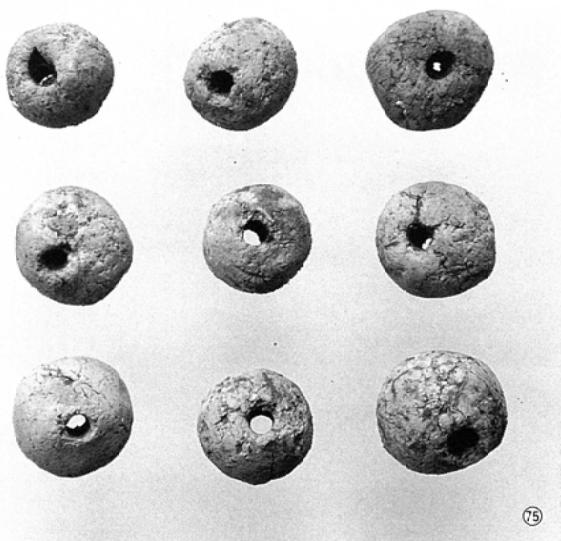
出土遺物(9)



第11図43 ⑫



第11図44 ⑬



⑯

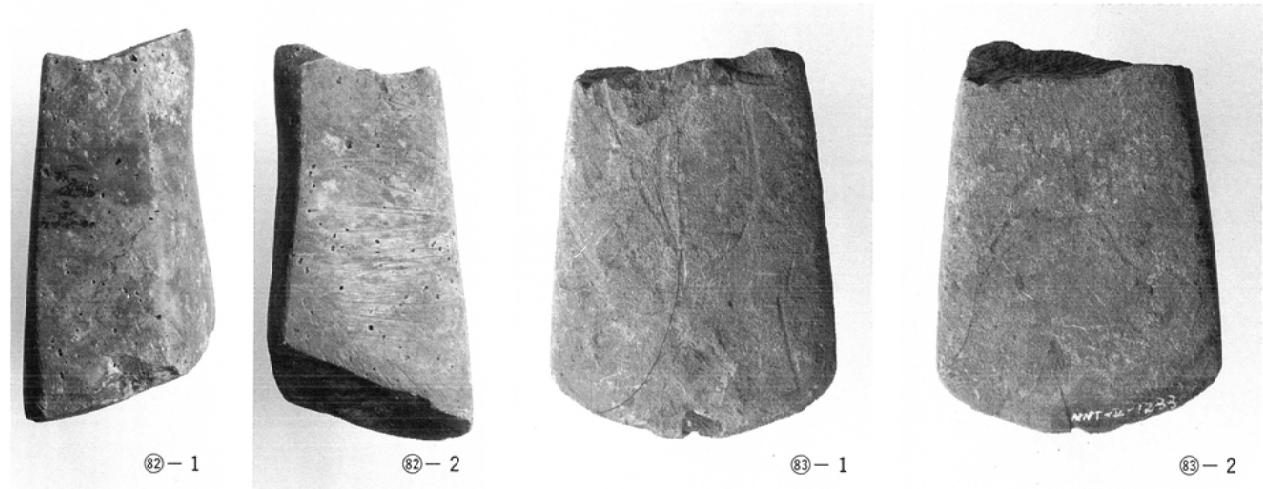
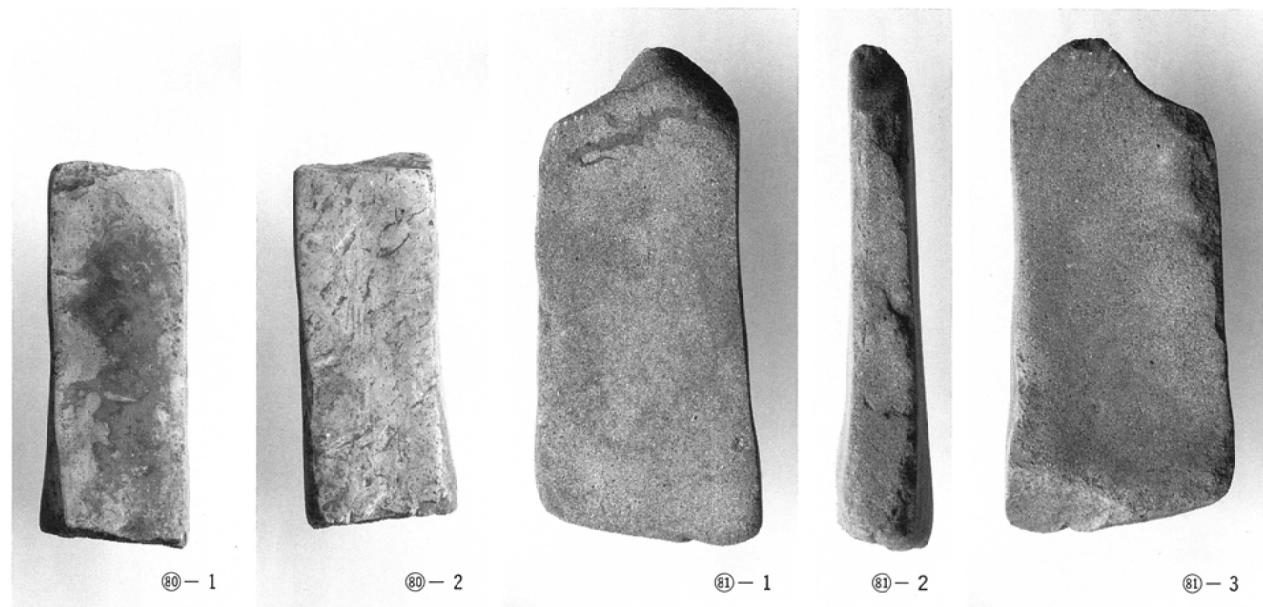
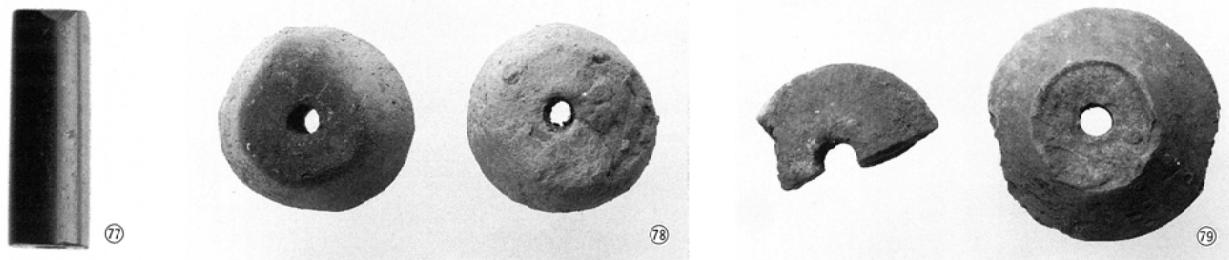


第11図46 ⑭



⑯

出土遺物 (10)



出土遺物 (11)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	てんどうしにしみまたいせき						
書名	天童市西沼田遺跡第II次発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	天童市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第21集						
編著者名	押野一貴						
編集機関	天童市教育委員会						
所在地	〒994-8510 天童市老野森一丁目1番1号						
発行年月日	平成11年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしむまたいせき 西沼田遺跡	てんどうし おおあざ 天童市大字 やのめあざぬま 矢野目字沼 たちない 田地内	6210	114	38° 21' 24"	140° 20' 44"	19980615～ 19980812	720m ²	史跡の保存・ 整備計画に伴 う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西沼田遺跡	集落跡	古墳時代後期	建築部材等	土師器、須恵器、 石器、木製品	特になし

天童市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集
天童市西沼田遺跡 一第II次発掘調査概報一

平成11年3月31日
編 集 天童市教育委員会
発 行 天童市教育委員会
天童市老野森一丁目1番1号
TEL 023-654-1111(代)
印 刷 豊田太印刷所
TEL 023-686-2518(代)
